

ケーン Cleo の中心を通過した時の観測結果を示しておこう、中心付近で気温が高い模様、かなり高いところまで低気圧性の回転があることなどがよくわかる。

これと関連し、南太平洋やインド洋では飛行機観測がないので予報官は非常に苦勞をしており、その観測が欲しいことをコテスワラム、ギャビティズなどその講義や討論で述べていたが、同感である。台風とハリケーンはほとんど同じであるが、ベンガル湾のサイクロンは少し構造が違うようであり、この方面の飛行機観測は気象学的にも重要であろう、日本においても飛行機観測が行なわれていないのは残念であるが、とにかく米軍の飛行機観測の資料がある程度手に入ることは技術者としてまだしも幸福であると感じた。

ハリケーンのレーダー映画

台風の移動の蛇行は飛行機観測により明かとなり、日本では予報官の常識となっているが、ジェントリーにより、ハリケーンのレーダー映画にそれがはっきりと示されたことは印象が深い。これは原理的にはわかりきったことであるが、レーダーに写ったレイン・セルがぐるぐるうずをまいて動いていく模様、このうずまきが次第に

移動し、ループをえがく模様など、感覚的にもはっきりと示してくれた。これは科学の研究においても経済力の威力の大きいことを示す1例であった。また、気象衛星タイロスの映画がアメリカのハッチンソンにより示されたが、これもその1例といつてよいであろう。

日本の評判

今回のセミナーは自画自讃のようであるが、大体において成功裡に終わったようである。気象庁、気象研究所、日本電気、横浜気象台の見学も行なわれたが、日本の気象業務に感心している人が多かったようである。しかし、日本人の講義は概して程度が高く、また語学の点もあって一般の出席者には幾分とつきにくい感があったようである。もっとも柳井博士の講演などは高く評価され、また久米予報官による実習などは好評であった。それは飛行機観測もなく、電子計算機のない国にとっては最新の程度の高い技術は宝のもちぐされである。それに対し、戦前の日本の台風予報の技術は、現場ですぐに役に立つからである。人をみて法をとけというのはこのことであろう。

台風の語源

新村出の『台風小記』は、昭和5年に書かれたものであるが、颱風の使用起原をたどったものである。しかし颱風の語源を論ずる気象専門家には、ほとんど無視されているので、ここに同氏の『日本晴』（昭17年、靖文社）所載のものから抄録してみよう。

わが国の学者が颱風の字を初めて記載したのは、伊藤東涯の名物六帳卷一天文箋（風雷雲霞）である。即ち颱風の二字をハヤテと訓して、それを郷談によって登録してある。名物六帳は初めの方は正徳4（1714年）正月の自叙を以て、享保10年（1725）の新刊である。

これに次いで、寛政元年（1789）に日向人が鳥島え漂流した時のことを記録した曾占春の『無人島談話』が古い。同書の気候の章に

「按に、清の王漁洋が番祖筆記に云、台湾風位他海とことなり、風大にしてはげしきものを颶となす。其の甚しきものを台となす。颶は倏発てで談止也、世につねに連日やまず、正二三月発ものを颶となす。五六七八に発ものを颶となす、九月は北風はじめてはげしく、あるひは

連月にいたる。これ此島の風俗台湾と較相似たり、”

清の王漁洋はかつて福建に在任したことのある人で、香祖筆記は1705年頃の出版である。曾占春について古いのは馬琴であるが、これについては紹介も多いので省略するが、その出典が徐葆光の中山伝信録巻一に見える風信の条であることはまちがいない。この本はわが国でも明和3年（1766）に重刻本が出ている。さらに徐葆光の風信考は、自己の考説ではなくて、琉球の名儒として聞いた程順則の指南広義（1708年の自序）によるものであることは徐の自註によって明らかである。

このようにして起原をたどってゆくと王漁洋の香祖筆記がもっとも古いことになるが、これはさらにさかのぼれるのであって、新村の推定では、康熙23年編輯（1684）福建通志卷五十六風志（台湾府）のうちの四時風信の条に帰着するのではないかという。そして清朝の台湾領有（1683）以後、所轄の福建省の官憲や舟師の間に行なわれた話であつて、彼等はそれを台湾海上の風という意味にとって、このような文字を造ったのかもしれないといっている。しかしさらにその起原が①大風、②台湾風、③風胎などにあるという諸説に対しては明らかにしておられない。（根本順吉）

“天気” 9. 5.